

## 第 2 回 琉球文化継承・振興検討部会 議事録

### 1. 実施概要

日 時	令和 2 年 10 月 23 日（金） 9 時 32 分～11 時 56 分
場 所	沖縄県立図書館 3 階ホール
委 員 6 人全員 参加	波照間永吉部会長、崎山律子部会長代理、石原守次郎委員、嘉数道彦委員、鈴木修司委員、平良美恵子委員
事務局	【沖縄県】 特命推進課：屋比久義課長、知念武紀主幹、新垣愛主査
関係部局 関係機関	【沖縄県】<Web 参加> 都市公園課：赤嶺涼一主任技師、又吉千秋主任 文化振興課：島尻和美課長、観光振興課：宮里耕平主任 ものづくり振興課：山下ひかり班長 女性力・平和推進課：前田昌哉主査 教育庁文化財課：諸見友重課長  【那覇市】<Web 傍聴> 企画調整課：上原曜一参事兼課長、都市計画課：島袋正吾課長 観光課：赤嶺文哉課長、商工農水課：町田務課長、文化財課：大城敦子課長

### 2. 議事録

#### ○事務局（知念特命推進課主幹）

委員の皆様こんにちは、本日、司会を務めます知事公室特命推進課 知念と申します。宜しくお願いします。

会が始まる前に、本日の配布資料の確認をさせていただきます。議事次第、配席図、それぞれ A4 1 枚です。その次に資料 1 としまして、「琉球文化ルネサンス」の捉え方で A4 横の資料となっています。続きまして資料 2 「首里城復興基本計画」たたき台、A3 横の資料となっています。資料 3 「首里城復興基本計画に関する有識者懇談会・部会合同会議のご意見に対する事務局対応方針」A4 横の資料となっています。参考資料 1 としまして、「琉球文化に関する基礎調査」A4 の資料となっています。最後に「琉球文化継承・振興部会 出席者名簿」となっております。資料に過不足などございませんでしょうか。

それでは、これより第 2 回琉球文化継承・振興検討部会を開始いたします。開会にあたり、特命推進課長の屋比久より一言ごあいさつ申し上げます。

#### ○事務局（屋比久特命推進課長）

皆様おはようございます。特命推進課長の屋比久でございます。開催にあたり本日の

部会でご議論いただきたいポイントも含めご挨拶申し上げたいと思います。

今回は、web で対応していただきました。今回初お披露目という形になりますのでどうぞ宜しくお願いいたします。

はじめに、先月 9 月 14 日に開催いたしました第 1 回有識者懇談会・部会合同会議におきまして、新型コロナウイルス感染症対策を踏まえた会議運営を行うことをご了承いただいたところでございます。このため Web 会議の開催を原則としておりますが、各委員からの強いご要望により、本日は部会全員がお集まりいただき、開催することとしております。

なお、沖縄県の参加者は、大変恐縮ではございますが、特命推進課を除く関係部局、県の文化振興課、観光振興課、ものづくり推進課、女性力・平和推進課、都市公園課、県教育庁文化財課の課長、担当者、またはその他関係課の担当者が Web での参加となっておりますのでご了承願います。また、オブザーバーの那覇市関係部門など関係機関もリモートで会議を傍聴しております。さらに、報道機関の皆様におかれましては、カメラ取材を除きリモートでの傍聴、取材にご協力をお願いしているところでございます。委員の皆様、報道関係者の皆様には新型コロナウイルス感染症拡大防止をご勘案いただき、ご理解ご協力をいただきますよう重ねてお願い申し上げます。

ところで、10 月 31 日は首里城火災から 1 年を迎えます。本日 10 時半から知事がメッセージを発することになっております。

さて、国においては 3 月 27 日に首里城正殿等の復元に向けた工程表を作成していただき、県土木建築部が中心となって、沖縄県も連携しながら正殿等の工事復元に向け取り組んでいるところでございます。その一方で、県では昨年 12 月 26 日に首里城の復元にとどまらず、首里城に象徴される歴史・文化復興の理念を示した「首里城復興の基本的な考え方」を公表しております。その後、本日部会長を務めていただきます波照間会長、崎山委員等の有識者懇談会のご意見を踏まえ、4 月にこれを踏まえた展開の大きな方針となる首里城復興基本方針を策定したところでございます。前回会議でご報告した通り、一部についてはこれに基づく取り組みを具体的に開始しているところでございます。

今回、本部会においては基本方針に基づき沖縄県が具体的に取り組むにあたっての方向性、指針、考え方についてご議論いただきたいと思います。特命推進課では、今部会のご議論を踏まえ、基本方針に沿った具体的な取り組みに関する方向性を県庁内部で取りまとめ、来年 3 月を目処に基本計画として策定するとともに、再来年から開始されます新たな沖縄振興計画へ反映させ、その実施計画で具体的な施策事業につなげていくよう取り組んで参ります。

そのためには 4 月に取りまとめました基本方針を施策体系レベルへブラッシュアップすることが必要であると考えております。詳細は後ほど議事事項の資料でご説明いたしますが、基本方針でまとめております各事項を施策レベルで基本施策、施策展開、そして施策につなげていくためのねらい、目標とする姿、目標達成への道筋を明確にしていくことが大切だと考えております。従いまして、本日はこのような観点からご

議論をお願いしたいと思います。

最後に本日はあいにくのお天気でやや気が減入ってしまいますが、本学会のご議論は活発にさせていただきますよう、波照間部会長どうぞ宜しくお願いいたします。

#### ○事務局（知念特命推進課主幹）

本日の部会に関しては委員の皆様は全員ご出席となっておりますので、お名前だけご紹介させていただきます。

—委員紹介省略—

それでは、部会長である波照間委員に進行のほうをお願いしたいと思います。宜しくお願いします。

#### ○波照間部会長

皆様おはようございます。本会の会長を仰せつかりました波照間永吉です。どうぞ宜しくお願いします。不慣れな点もございまして、進行をしっかりとできるかどうか、心もとないところもございますが、委員の皆様のご協力、そして活発な議論を展開していただくことによって、本学会を進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくをお願いいたします。

それでは、議事次第に沿って議事を進行して参りたいと思いますが、本日決めなければいけないことがございます。部会の規約によりまして、本学会には副部会長を設けなければならないということになっております。副部会長につきましては、私の方で指名するということになっておりますので、副部会長として崎山律子委員をお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。（異議なしの拍手）それでは、崎山委員をお願いしたいと思います。宜しくお願いします。

それでは、報告事項へ移ってまいりたいと思います。まず、事務局のほうから前回は行いました合同会議のふりかえりの報告をしていただきたいと思いますので、事務方のほうから。課長宜しくお願いいたします。

#### ○事務局（屋比久特命推進課長）

屋比久の方から説明させていただきます。説明の前にひとつ申し上げておきます。議事次第に特命推進課のツイッターの QR コードを入れてありますので、ぜひフォローになっていただき、皆様とともに首里城復興に取り組んでいきたいと思っておりますので、ご支援宜しくお願いいたします。

では、報告事項についてご説明申し上げます。第 1 回合同会議のふりかえりとありますが、第 1 回会議で各委員の方からご意見がございました件に対して事務局の対応方針という形でとりまとめであります。本日お配りした資料は、本学会に関する事項のみのピックアップとなっておりますので宜しくお願いいたします。

ひとつひとつ説明しますと時間がかかりますので、かい摘んでご説明させていただきます。主なものとして取り上げておりますのでご理解をお願いいたします。ちなみ

に、説明するにあたっては、対応方針、今後どうしていく、というものを中心に説明いたします。

では、2 ページをご覧ください。新・首里杜構想検討部会の上原委員の「首里城は戦跡であるので、それらを活用することが必要ではないか」というご意見がございました。それにつきましては、その他の先生方からも色々なご意見がありました。佐久本先生も同じようなことをおっしゃっていました。これについて、県こども生活福祉部では、首里城公園地下にある第32 軍司令部壕について、今年度設置する第32 軍司令部壕保存活用検討委員会において、今年度から来年度いっぱいかと思いますが、議論をして、なんらかの方向性を出していくと聞いております。

続いて5 番目、部会長からのご意見でしたが、文化財の修復に関することで県立芸大の活用、意見の聴取が必要ではないかということでございました。それにつきましては、文化振興課のご協力をいただきながら、県立芸大大学長のヒアリングを行ったところでございます。将来の文化財あるいは保存修復分野の学位取得にも繋がるようなカリキュラムを検討していきたい、というご回答がございました。

3 ページ8 番目、嘉数委員より、首里城を活用して芸能を発信する。これを始まりとして次のステップにつなげ、琉球文化ルネサンスに位置づけることが大切、ということでしたが、例えば、県の都市公園課の方では、首里城の行催事にあたっては、伝統芸能等の披露の場としての活用も検討していきたい、という方向で回答がございました。文化振興課さんの方では、首里及びその周辺エリアにおいて、伝統芸能の鑑賞など、琉球文化を体感できる機会の創出の検討、文化振興会や国立劇場おきなわ等文化関係団体との連携・協力による観客等、観光客のみならず県民も引き込む仕組み作りの検討を行いたい、という回答でございました。

4 ページ。これは平良委員からのご意見でございます。伝統工芸は範囲が広く、王朝時代の技術継承は、職人の育成がポイントである、というご意見でございました。これにつきましては、ものづくり振興課、文化振興課、文化財課さんからの回答で基本方針が示されておりまして、例えば伝統工芸の技術研究や後継者の育成を支援する取組を継続して実施していきたい、伝世資料の材料や技法、構造の忠実な復元制作を行うとともに、工程や完成品の成果を広く公開し、技術者の育成につなげたい、という取組も考えられる、との回答がございました。

さらに平良委員からは、県外に保管されている伝統工芸品のリストアップが重要ではないか、という意見もございました。これについて、県教育庁では、平成2 年度から米国を対象に調査を行っており1041 点の沖縄関連文化財資料を確認しているところです。今後は中国を対象とした琉球関係資料の調査を行っていききたい、としております。また、博物館の活動として、例えば里帰り事業として国内外にある王国時代の資料も継続して調査していきたい、という回答を得ております。さらには、伝統工芸関連で、ものづくり振興課では、文化資源を有効活用したビジネスモデルの創出や新商品開発を推進するなど、裾野の広い産業の振興を図っていききたい、としております。

最後に5 ページになりますが、鈴木委員、石原委員、同じような産業振興関連から

のご質問がありまして、それにつきましては、ものづくり振興課さんから、先ほど申し上げたような異分野・異業種と連携し文化資源を有効活用したビジネスモデルの創出等を含めた裾野の広い産業振興を図っていきたい、との回答でございました。

以上、急ぎ足でご説明いたしました。ご意見の趣旨を踏まえながら、基本計画の内容に取り込んでいきたいと考えております。報告事項は以上でございます。

○波照間部会長

ありがとうございました。ただいまの事務局の報告について、ご質問なり疑問等ございましたら、どなたからでも結構ですので、ご質問ありますでしょうか。

○事務局（屋比久特命推進課長）

議題の中でもつながる事項だと思っておりますので、ここでは報告事項に留めていただきたいと思っております。

○波照間部会長

課長の方からは、次以降の議論の中で先ほどの取りまとめについて、色々考え方も出るだろうから、後にしようという提案でございます。よろしいですね。

それでは、議事に移りたいと思っております。まず資料Ⅰをご覧くださいまして、「琉球文化のルネサンスの捉え方」についてご説明をお願いします。

○事務局（新垣特命推進課主査）

特命推進課の新垣と申します。私の方からは資料Ⅰ「琉球文化のルネサンスの捉え方」についてご説明させていただきます。説明を始める前に、本会議の前提条件と検討事項ということでお話させていただきたいと思っております。

まず、議論の前提条件といたしまして、県では首里城に象徴される歴史・文化の復興を目指して9つの方向性を示す「首里城復興基本方針」を策定いたしました。その中でも首里城を中心とした歴史を体現できるまちづくりの推進と「琉球文化のルネサンス」を興すことが大きな柱となっております。そこで、「琉球文化のルネサンス」については、単なる方針の1項目ではなく、「首里城を中心とした歴史文化の再評価と復興」という視点から議論を進めていただきたいと存じます。首里城と密接なかわりを持つ文化についての取組を展開することで、文化の振興、ひいては離島を含め、沖縄全体における歴史文化の再認識、復興・新たな文化の創出と活用へつなげ、沖縄振興が達成できるものと考えております。

以上の前提条件を踏まえまして、今回議論していただきたい事項としましては、後ほどご説明いたします、首里城復興基本計画のたたき台の中の琉球文化のルネサンスに関するもの、その中で「基本施策のねらい」「目標となるすがた」「主な課題」「目標達成への道筋」について以下の観点から議論していただきたいと思っております。首里城を中心とした、また首里城に象徴される歴史・文化を深く理解していただくこと、広く体現

していただくには、どのように取り組むべきか、首里城に象徴される歴史・文化を資産として活用するためには、どのように取り組むべきか。琉球文化のルネサンスができている状態というのはどのような状態か。委員の先生方が考える方向性についてお話いただきたいと思っております。

続きまして2ページになります。「琉球文化とは」と、まとめてあります。まず、琉球文化の性格と形成過程につきまして、琉球文化、沖縄文化の性格は大きく3つに整理できるだろうと考えております。まず、亜熱帯の島嶼地域を背景に形成された風土的な性格、海を目前にして、小さな島に生きる人々が生みだした世界観で、祭祀や信仰、染織や漆器等の生産環境を与えたものだと思います。次に風土的な性格に影響を受けた王朝性という性格。首里城を核に形成され、その後地域へ波及され、現在の伝統文化の骨格となるものであり、城を維持する建築技術や、飲食や芸能等多岐にわたるものだと考えております。さらに国際性という性格もございます。中国・日本・朝鮮・東南アジア諸国との外交・貿易により形成され、三線、泡盛、亀甲墓など、中国からももたらされたものも多いかと思えます。これら琉球文化のもつ性格の形成過程を整理しますと、琉球文化は大きく「首里城と関係性の強い文化」と「民俗文化、地域文化」に整理できるのではないのでしょうか。ただし、これらは完全に区分できるものではなく、相互に関連しあって現在にも継承されているものであります。また、伝統的な要素をもとに、新たに創造する取組も行われているところです。

次のページになります。琉球文化のルネサンスのイメージ像ということで、まず琉球文化のルネサンスとは何かについてです。ルネサンスとは14～15世紀のヨーロッパ社会で起こった革新的な文化運動で、古代文化を理想とし、それを復興させつつ新しい文化を生み出そうとする運動で、思想、文学、美術、建築など多方面に渡ったものです。琉球文化のルネサンスとは、県民が歴史・文化の理解を深め、それを大切にしつつ、自らが主体的に関わりながら、新しい文化の価値や生活スタイルを生み出すこと、その大きな活動と考えられます。さらに首里城復興にあたっては、県民が、首里城を中心とした歴史・文化の理解を深め、自信と誇りを高めるとともに、県外の人びとに対して、沖縄の価値を高めることで沖縄振興に貢献していくことが重要であると考えています。

下のページはイメージ像になります。かつて、首里城と琉球文化については、王朝文化、宮中文化と書いてありますが、首里城と関係の深い人々から波及伝播し、地域文化へつながり、またさらに首里城へ戻ってくるような形になっていたかと思えます。今回、首里城の復興、琉球文化のルネサンスにあたりましては、首里城と関係性の強い文化の復興ということで、首里城を中心とした歴史文化の理解を深めていき、民族文化、地域文化へと波及し、さらに現代的な生活への浸透、新たに創造する取組、現代の生活に対応した物産や芸能などへ、手を加えながら活用し、これらが洗練され、新たな文化が創造される、そしてそれがまた伝統へ戻っていくというようなサイクル。そういったイメージをしております。

続きまして、復興基本計画における取組推進のページをご覧ください。首里城復興基

本計画は、令和 2 年度中に策定しまして、新たな振興計画のスタートを短期のゴール、首里城正殿の復元、北殿、南殿等の工事着手に入る令和 8 年度を中期的なゴール、新たな振興計画最終年、令和 13 年度を長期的なゴールということで捉えていきたいと考えております。これらのゴールを通じて、最終的に目標となる姿としましては、「県民が、首里城を中心とした歴史・文化の理解を深め、広く体現し、自信と誇りを高めている。」「首里城に象徴される歴史・文化を資産として活用し、県外の人びとに対して沖縄の価値を高めることで沖縄振興に貢献している。」このような姿を目標にしていきたいと思います。さらに下のページに続きます。首里城復興基本計画における取組の推進方法というところで、昨年 12 月、首里城復興の基本的な考え方を策定いたしました。それに基づき、今年の 4 月にその方向性を示した基本方針を策定しております。この方向性を基に今回の計画を整理していきたいと思っております。琉球文化のルネサンスについての取組の方向としては、21 世紀ビジョンや文化芸術振興条例の理念を踏まえて策定し、この取組は新たな振興計画の実施計画の指針となると考えております。

最後に、施策別の目標とするすがた「たたき台」のほうでございます。首里城復興基本計画の中の 4. 文化財等の保全、復元、収集、5. 伝統技術の活用と継承、7. 歴史の継承と資産としての活用、8. 琉球文化のルネサンス。こちらが本部会でお話いただきたい項目となっております。目標となるすがたは、後ほどたたき台の中でご説明させていただきますが、こちらのほうが本日、議論していただきたい内容ということで考えております。

資料 1 の説明については以上となります。

#### ○波照間部会長

ご苦勞様でございました。ただいま事務局より「琉球文化のルネサンスの捉え方」についての説明がございました。「琉球ルネサンス」のイメージについての整理もありました。本日みなさまに議論していただきたい事は、基本計画における「琉球ルネサンス」に関する目指すべきすがた、ということですので、次の首里城復興基本計画（たたき台）資料 2 の事務局説明の後に、意見をお伺いしたいと思います。では、次に議事の 2 つめの「首里城復興基本計画（たたき台）について」を事務局から説明をお願いします。

#### ○事務局（屋比久特命推進課長）

冒頭で簡単に私から、また、詳細については担当からご説明いたしましたが、新垣から説明のありました本会議の前提条件と検討事項、議論していただきたい事項を踏まえながら、たたき台を見ていただきたいと思います。

左のほうに基本方針の項目や内容を入れておまして、右の方にそれを踏まえた基本施策、例えば、文化財等の保全、復元、収集という基本施策を入れてあります。この施策のねらいは何かということで、基本方針を読み解くと、こういうことが言えるのではないかと、こういうことが狙いではないかと、そういうことを狙って取り組むことで、

例えば最終年度の目標となる姿、こういう姿になっていくのではないかと、それを達成するための課題として、ここでは3つ挙げられています。また、基本目標を達成するためのストーリーとして、こういうストーリーが考えられるのではないかとという道筋を示した構成になっております。ここを本日のメインの議論にさせていただいて、議論の内容を我々の方で整理した上で、資料の右欄、施策展開となる右の(1)(2)とありますが、ここに落とし込んでいきたいと考えております。これらを踏まえながらご議論いただければと思っております。では、内容について知念から説明させていただきます。

#### ○事務局（知念特命推進主幹）

本日は、基本施策のねらいと目標とするすがたについて説明させていただきます。基本方針は1~9の項目までありますが、本部会の方では4、5、7、8のほうを所管しておりますので、その項目について読み上げていきたいと思っております。

項目4のほうについて、「文化財等の保全、復元、収集」についてでございます。基本施策のねらいとしまして、周辺文化財を含めた首里城跡の発掘調査等学術的な成果等を一体的に整理するとともに、保護を適切に実施し、その歴史的価値を高め、周知する取組を推進する。また、首里城正殿等の復元に向けた工程表に合わせ、焼失・被災した文化財等の修復及び復元の計画的な取組を推進する。また、国内外に散逸した美術・工芸品等を含む文化財等の収集・修復等に関する一元的体制を確立し、文化資産を守り継承する取組を推進する。としております。続いて、目標とするすがたにつきまして、首里城周辺の文化財を含めた首里城跡の歴史的価値が評価されるとともに、保全に必要な措置が適切に実施されている。また、焼失・被災した美術・工芸等の文化財の修復及び復元が取り組まれている。さらに、国内外に現存する美術・工芸品等の展示会等が沖縄で活発に実施されているとともに、必要な修復等が沖縄で実施されている。さらに、それらの収集が積極的に取り組まれ、文化が継承されている。としております。

続いて、項目5のほうにまいります。項目5は、「伝統技術の活用と継承」となっております。基本施策のねらいとしまして、首里城で使用されている建築技術を今回の復元だけではなく、今後の修復に活用できるよう継承していく。また、琉球王国時代から脈々と受け継がれ、沖縄らしさの源流ともいえる美術工芸における伝統技術についてもその活用をはかり継承していく。としております。また、目標とするすがたとしまして、伝統的な建築技術が蓄積、継承され、首里城正殿等の華美なたたずまいが悠久に受け継がれている。模造復元製作の成果や伝統工芸品の修復に係る教育の推進により、その技術が蓄積、継承され、県内、国内外にある琉球王国時代の文化財等の保全がされ、沖縄らしさが継承されている。としております。

続いて、項目7について、「歴史の継承と資産としての活用」でございます。基本施策のねらいとしまして、首里城及びその周辺地域を観て学ぶことができる観光資源として活用していくことで、首里城を中心とした歴史・文化の継承に取組を推進してい



く。目標とするすがたとしまして、まちなみを含めた首里地域に点在する歴史・文化的遺産、これらを背景とした生活文化など、地域の潜在的な魅力が資産として認識され、各主体がそれぞれの強みを生かしつつ相互に連携して歴史・文化を体現できる取組が活発に実施されている。首里城周辺に存在する戦争遺跡が適切に保存されるとともに、第 32 軍司令部壕を活用した平和の学習環境等が整備され、悲惨な沖縄戦の実相が正しく後世や世界に伝わり、「沖縄」をより深く知ってもらえている。首里城の復興を通して、沖縄の歴史・文化を感じることができるとともに、ふるさとへの誇りや愛着が生まれ、文化の継承につながっている。となっております。

続いて最後のページとなります。「琉球文化のルネサンス」について、基本施策のねらいとしまして、首里城の焼失によって改めてその価値が再認識された沖縄独自の文化について、自信と誇りを持ち、その価値を将来に向けて高め、世界に発信していく。目標となるすがたとしまして、多様性・独自性のある県内各地の地域文化などの価値が再認識されることで普及・啓発され、県民に琉球文化を身近に感じてもらえている。首里城、首里城周辺が県民の感動体験の機会を創出する拠点となり、多くの県民に首里城を身近に感じてもらえている。沖縄の多様な文化が世界へ発信され、沖縄の認知度が高まっている。伝統技術を活かした商品開発や販路拡大等が行われ、現代のライフスタイルに広く活用されている。としております。以上がたたき台における基本施策のねらいと目標となるすがたととなっております。

#### ○波照間部会長

それでは事務局の説明について、委員のみなさまのご意見をお伺いしていきたいと思いますが、ここで、10分ほど休憩をとりたいと思います。

<休憩>

#### ○波照間部会長

先ほど事務局の方から A3 の資料について色々と説明を頂きましたが、この琉球文化継承・振興部会が担当するところの基本方針の項目は「4 文化財等の保全、復元、収集」「5 伝統技術の活用と継承」「7 歴史の継承と資産としての活用」「8 琉球文化のルネサンス」となっています。事務局からの資料2の表の「たたき台」という部分の「基本施策のねらい」、「目標となるすがた」それぞれについて、ご意見をお伺いしたいと思います。琉球文化のルネサンスというものの方向性について、お話いただけたらと思っています。それではまず、「文化財等の保全、復元、収集」につきまして、保全継承という視点で、伝統工芸の分野から平良委員のご意見をいただきたいと思っております。よろしくをお願いします。

#### ○平良委員

伝統工芸の職人全般の意見として、琉球文化のルネサンスというのは、何年くらいを

目標にしているのか、1610年なのか。その当時にルネサンスの始まりとするのが、ちょうど410年前なんですけど、江戸立ちの最初に尚寧王が駿府に家康公にご挨拶に向かった。その当時のルネサンスというようなことであると、江戸時代辺りになる。ちょうどこの県立図書館の下に仲島の大石があって、ちょっと見てきたんですけど、なぜか神社の鳥居があって、お賽銭箱に鍵がしてあって、あれ、こんなになっちゃってるの？と。昔はしめ縄あったんだけどな、もう何もなくなってるっていうので、何もかもがごちゃごちゃになっている現状がある。文化のルネサンスというならどの時代のことをいうのかなと気になるなということ。伊勢神宮なんかは遷宮、何十年に1回やるぞっていうようなことがあって、頭の中に考えてないと思うんですが、そういうことで技術が継承されていくっていうのはよく言われていることです。それで、キャンペーンとして5ヵ年ぐらい、今後の首里城が出来るぞというそれまでの時間に、広報として、沖縄県内の歴博とか県博、浦添美術館だとかっていうようなところは、全部、沖縄の中の美術館や博物館はすべて琉球王朝に関するものを毎年1回入れていく。行事を入れて行って、県民も県外の人も見ることが出来るっていうようなことをしては。それを、江戸立ち410年というのであれば、鹿児島県の有名な博物館、名前が出てこないのですが、鹿児島県には、沖縄関係の資料も多くあります。奄美大島では、教育委員会管轄の沖縄の黒朝（クロチョウ）の素晴らしいものとか、（鹿児島県）宇検村教育委員会などが持っているものとか。徳川美術館はもっとすごい物を持っている、松坂屋コレクションとか。そういうようなところにみんな依頼して、公開してほしい。ここに持ってこいということは、絶対もう、お金的に無理ですから、そこが主催で今年こういうものを公開してほしいというようなことを依頼して、沖縄琉球文化を発信してほしいということを依頼して、県内外にてキャンペーン的に発信してもらおう。もっと言えば海外のドイツの民族博物館とか、アメリカのワシントンDCのスミソニアン博物館の中とかの所蔵品の公開をこっちの方から願います、申請するっていうようなことをすれば、みんなも見れるけれども、職人という人たちが見るチャンスがあって、そういう調度品だとか建物だとかそれから文化的なことだとかを勉強する機会になる。お金をかけずに申請したり、熱意でできるキャンペーンというのは、こういうようなところの公開をお願いするっていうようなことじゃないかなと思うんだけど。そうじゃないと、沖縄の工芸の人達がこの首里城復興基本計画にどうやって参与するかって言いますと、難しいんです。本当に職人たちはその1本でって言うても3Dの時代に無理なんですよね、機械使わずにってなったら。そうなったら目指すのは、現在できる最高技術で、今現在で使える技術を全部補ってできるレプリカに向かっていくのかなと思うんです。今後、100年経って150年経ってみんなが素晴らしいと言ってくれる国宝になるようなものを目指すっていうのは、今の職人が目指すのはちょっと違うんじゃないか。それには時間がなさすぎると思います。だから、今の現在の伝統工芸に携わっている人たちが、もっと、例えば織物でしたらば、もう沖縄だけでは不可能なので、西陣、もしくはフランス、そういったところまで技術の踏襲というようなことでヘルプをお願いしないとできないと思います。高機の、しかも原材料も絹

をどこから手に入れることだと考えたら、芭蕉と芋麻のみが自給自足できますが、他のものは無理なんです。世界中相手に、全部よそのもので行くわけですから。その他の漆に関してもそうですね。琉球産の漆って元々そうじゃなかったんだから。古い時代から、その先進地、遣唐使・遣隋使があって、みんなそういうところから。陶器もそうですね、中国の人に言わせれば漢字まで借りてるじゃないか、そういうふうになるわけですから。職人は、見せてもらえるだけ見せてもらって、頭の中の意欲を掻き立てるようなことをしてもらえれば。できる範囲で。このプロジェクトに関与して、技術的なことでうまくいくことの少々の力にはなれるのではないかと思います。見せてもらえるチャンスがある、そして、このプロジェクトからは発信する、どこどこに何があるというようなこと、徳川美術館さんお願いします、琉球ものの展示会やってください、っていうようなことをお願いします。穴場である松坂屋コレクションとか、なかなかみんな注目していませんが、あるんです。だから、そういうのを見せてほしい。見せてもらうのはタダなんです。持ってきて沖縄で公開するよという美術梱包だけでもかかるのに飛行機ですから 50 万円くらいかかる。名古屋から松坂屋コレクションを静岡に持って行くだけで 30 万円。もう難しいんですよ。だからあちら側も公開する。公開してもらえるっていうチャンスをこっちからお願いしてほしい。

#### ○波照間部会長

正確に聞き取れたかわかりませんが、問題が2つあったと思います。

琉球ルネサンスという言葉がキーワードとして使われていますけれども、その琉球ルネサンスというものが目指す、いわゆる歴史的な時代はどのようなのかと。1609年の薩摩上り以降、その1610年以降にこの琉球において起こった文化状況のことを続行することを目指す、それが琉球ルネサンスなのかどうなのかという、基本的なコンセプトにかかるところについてのご質問でございます。これは、事務局の方からお答えいただきたいと思います。

もう1点は、これは具体的な事業としての提案でございました。いわゆる工芸に携わる方々が勉強する機会をつくってほしいと。本物を見ることによって、職人たちはたくさんの勉強をするんだと。だから沖縄にいろんな博物館や美術館から優れた物を持ってきてもらって、展示して、県民に見てもらう、そして同時に職人にも見ってもらう。それだけじゃ足りないというんですね。そのうち、日本国内に優れた品物を収蔵している美術館や博物館がある、そういったところと連携して、沖縄のものを一斉に見てもらうような運動、あるいは周年事業といってよろしいと思いますが、そういったものを中期・長期の観点で展開してもらって職人たちが勉強する、そのような機会をつくって欲しいという趣旨のご発言だったと私は受け止めております。それでよろしいですか？

じゃあ、ただいまの、特に琉球ルネサンスが目指す時期というものを事務局でどう考えているか、よろしくをお願いします。

○事務局（屋比久特命推進課長）

特命推進課の屋比久です。私の方から、特命推進課ではどういうことを目指しているのかという視点からお答えします。

まず、先ほど新垣からも説明がございましたけれども、沖縄県は、日本本土から遠隔の地にあり、また亜熱帯性気候という、国内では特有の気候も持っています。東西、当時は奄美も含めると思いますが、東西約 1000km、南北約 400km の広大な海域に、今は 160 の島々があると言われております。そういった地理的な特性の中で、太古の時代からここに住む人々、我々のご先祖様が、言語であったり信仰であったり思想や慣習・儀礼だったり、その他諸々技術・技能も含めてですけど、そういったもので独自の文化を育ててきた。また、交易の時代になったら、他の文化と海を越えて交流してきたことが、今のわれわれの文化に繋がっているということが、基本の認識でございます。その一方で、波照間先生のご専門になるかと思いますが、近代の歴史を見ると、産業革命以降、ここから近代化していくにあたって、どんどん中央集権化していく。その中で沖縄も日本という国の中の多様性のある一地域から、統一性のある日本という近代体制に組み込まれていってしまった。

これは、大きな時代の流れで、潮流であり、あがらうことができなかつたかもしれません。この大きな流れの中で、琉球の文化、言葉も失いつつあった。そして太平洋戦争で、文化の象徴的な首里城も失ってしまう。また、沖縄の宝、文物も国内外に流出してしまった。そういった中で首里城を中心とした、我々が今持っている、昔から繋いできた沖縄の文化をいかに大切にしていくか、首里城をひとつのきっかけにして未来に繋げていきたい、これが大切なことではないか。私自身、首里城復興基本方針あるいは、その前の基本的な考え方を何度も読み返すとこのような考えに至るようになっております。

従いまして、300 年前、あるいは 400 年前の文化を目指すのではなく、今につながっている文化をしっかりと評価をして、将来に向かって新しい沖縄の文化を創っていく。次の展開は鈴木委員あるいは石原委員のご専門かもしれませんが、産業振興と言うと、小っちゃくなるような気もしますが、文化の評価、そして文化創造をベースにして沖縄振興につなげていくんだと言うのが、この首里城復興だと理解しております。

です。平良委員がご指摘された、数百年前のものを復興させるのではなくて、過去からつながっているものをしっかりと評価をして、未来に向かってつないでいくために今、何ができるのか。令和 13 年までの期間を掲げておりますが、その間で、まずはどういうふうなことをやって行きましょうか、ということになるかと思っております。

未来に向かう観点で言えば、これはこれから委員皆さまのご議論をいただいた中で形を作っていくものですが、首里城の復旧に留まらず、首里城を核として歴史文化を再評価する。これをベースにして文化の発展・復興により沖縄振興に繋げていくこと、さらに、それが循環している、そこで止まるのではなく、どんどん進化していくというイメージを考えております。このような循環は、この基本計画の有無にかかわらず、ずっと続くはず。その基礎、ベースを首里城の正殿、北殿、南殿など施設の復元に合

わせたこの期間の中で、まずはどのような取り組みの方向性を我々は持つべきなのかということをご議論いただきたいと思います。基本方針が遠い未来を見て書かれている部分もあり、それは100年経って達成することかもしれません。ですが、今の我々が100年を見据えて、基本的な計画を立てることは正直難しい話ですので、まずは首里城の全体の復元を終える、国に示していただいた工程表の期限、また、新たな沖縄振興計画、10年の期間になると思いますので、その終期と目される令和13年度末を目指して、何を、どういうふうな取り組みをしていけばいいのかという形で取りまとめたいと考えております。

#### ○波照間部会長

ただいまのご説明でよろしいかと思いますが、まあ簡単に、極めて乱暴なまとめ方をすると、いわゆる琉球という国家があって、遡ると10世紀、11世紀から始まるグスク時代からはじまり、そして1879年があり、1945年がある。そういった長いスパンにおけるこの地域において作り出された文化。そして歴史に対応するこの文化そのものを我々が目指す原点と申しましょか、文化の姿である、作り出した文物の豊かさを改めて、この21世紀に我々の力でこれを受け継ぎ、それ以上のものをつくっていくことを目指す、これが琉球ルネサンス文化運動なんだと言う風に理解すればよろしいということだと思います。平良さんよろしいでしょうか。乱暴なふりかたではあったと思うんですけども。

#### ○事務局（屋比久特命推進課長）

部会長よろしいでしょうか。補足いたしますと、先ほど平良委員のほうから具体的な取組の考え方、方向性を示していただいたと理解しています。部会長にまとめていただきましたが、職人さんが技術・技能を次につなげていく、あるいはブラッシュアップしていく、あるいは昔のものも習得するためには勉強する機会が必要になる。そういった機会を提供することが必要、提供できるような機会も必要なのだという具体的な方向性だったと思います。そのご意見も踏まえながら、庁内でどのような取り組みが今後できるのか、あるいはそこをどういうふうに目指していくのかということを庁内で議論してまいりたいと思います。

また、先程の薩摩侵攻から江戸へ行く話がありました。先日、私も静岡市の清見寺にお伺いしまして、具志頭王子のお墓、墓標というか、お参りをして、地元の方からお話を聞かせていただきました。地元の方が非常に大切に琉球の王子さんのお墓を守っている、というものが体験しております。そういった気持ちを忘れることなく、文化、歴史を評価し、次に繋げていくということが大切だと理解して、取り組んでまいります。以上です。

#### ○波照間部会長

続きまして、項目の5番目、伝統技術の活用と継承につきまして、ここも美術工芸

の分野における伝統技術の継承という観点から、これもまた平良委員の方にご意見をお伺いしたいと思います。平良さんいかがでしょうか。伝統技術の活用と継承という観点、ここに問題を絞ってお話いただけませんか。

#### ○平良委員

団体が2つあるんですけど、教育庁文化課関係の保存会関係、〇〇保存会、花織保存会、読谷山花織の保存会と、組合と伝産法の経済産業大臣指定の伝統的工芸品を扱う組合です。全部のという感じで沖縄には色々あるんです。三線も入っております。伝産の指定は全国で3番目に多いんです。その2つありまして、県の教育庁関係の方の保存会は少ないんです。団体も少ないし、人数も従事している人も少ない、予算も少ないです。残念ながらもう数字が1桁違うぐらい少ない、ウン十万というようなところが県からおりてきて、それでどうやって後継者ができるのよというのが教育庁関係。国指定の伝産関係の方は、各組合員は賦課金を出します。そして、組合員になるために紅型組合だったら20万かな。なんかそういうふうに出して会員になって、毎年毎年月2000円とか出して運営管理をしている。そこが後継者育成事業をやっている。2つの団体が2つの方法で後継者育成をやっています。もうその後継者育成事業は毎年毎年組合によって特化して、とにかく染織りの場合でして、特に織りの場合だったら織れる人。まず全くの素人10名とか5名とか集めて織ることができる人ということにしますと、首里織なんか指定品目がいくつもあるわけです。それを半年間でって言ったら、何とか組合でできるのは道屯織とか花織とか、指定品目の内、一つか二つをなんとか踏襲して半年間、7ヶ月間でできる。読谷山花織だったら、読谷の人に限定するって指定が入るわけです。まず読谷村の村の補助金が入りますから、村内に従事する人。大宜味村の場合ですと、大宜味村民みたいな、組合自身の定款で大宜味村内の人が事業所もしくは住民票のある人が組合になると定款でうたわれていますから、村内ってことだけで締め出します。それなのに、後継者を育てるっていいしますのでとても難しいです。後継者を作るって言うことをどうやってしてやっているか、ものづくり振興課も文化課の方もちゃんとそれなりにやっておりますというお答えを頂けると思うんですが、明確にこの首里城の復興というようなことを考えると、どんな物はこの後何年間で、どういう風なものを後継者にしなきゃいけないってことを考えると、残念ながら後継者になる人、芸大を巻き込んだとしても難しいな、新人をってのが難しいって思われます。って言うことは、今すでにいる従事者に特化していかないといけませんってことです。後継者は漆もそうです。漆の業界自身が大変なところにあるわけですから。言っているのかな、組合が崩壊しているというような状況ですから、後継者育成事業と言っても個人に委ねられるって感じです。とってもこの職人の育成というのは現状は難しい。システムはあるけれども難しいと思います。よほど、はっきり言って金銭的な面がサポートされないと。産地、各産地は難しいと思います。以上です。

#### ○波照間部会長

どうもありがとうございました。伝統技術の活用と継承という観点から、どのようにして継承しているかという問題に対して、現状のご指摘があったと思います。行政であるとか工芸に具体的に従事している方々がつくる組合であるとか保存会、様々な形で取り組みがなされているけれども、現状ではどれも効果的な取り組みができていないとはいえないだろう、というとりまとめになるかと思いますが。ちなみに、これはみなさんの方にも配られておりますけれども、沖縄県の文化に関する基礎調査と言う資料の中で、私も大急ぎでしか見ておりませんでしたけれども、この資料の11頁から15頁ですかね。ここに伝統工芸品等々の平成26年から平成30年までの、生産額の推移であるとか、個人のいわゆる収入ですね。そういったものの表がございます。これをちょっと見ておりましたら、観光客は1000万人だと非常に景気の良いことを言っておりますけれども、工芸全般は下がってるんですね。やはりそういったことを思うと、具体的にこの工芸に従事していて、生活が出来るという状況を作らなければ、決して伝統工芸におけるルネサンスは起こらないという、そのような趣旨の発言だと私は理解致しました。非常に重要な現場からの指摘だと思います。この5項目について、みなさんの方からこのようなことがあるというふうなご指摘がございましたらお出しただけませんかでしょうか。

#### ○鈴木委員

私達は販売する側ですが、作り手さんと非常に接点が多いものですから、現場のご苦労は私達も感じているところです。今お話があったように、技術に関しては、国の伝統工芸施策、技術に関しては現場の方からすればまだ確かに足りないかと思うのですが、そういった国からいくつか支援があるんですけれども、私達がみていて感じるのが、そこである程度の技術を持った方が、この後食べていければ続けられるし、食べていけないと続けられないということで、国からの支援で技術を持った方がその後食べていけなくて、業界から離れていくというのは何人も見えていますので、技術を持った後に産業として、どう結び付けられるのかが非常に重要ではないかと思っています。そうなってくると、産業として残していくのか、文化として残していくのかという方針も、どうしても産業として残すのが難しいジャンルも正直、工芸なんかはあるものですから、そこは文化として範囲を絞って対策を打っていく見極めもどこかで必要ではないかというふうには思っております。そこは中途半端になってしまうと非常に産業としては難しいけれども、産業での対策を講じて、なかなか継続性がないというのは、現場でみていて感じているところです。

#### ○波照間部会長

どうもありがとうございました。非常に厄介な問題と言うべきか。文化として残すべき工芸と、産業として現在の生活と密着した形での残し方と二つあるのではないかということだったと思います。これについては、我々はこの部会だけじゃなくて、県の他

の産業関連の部局とこの問題をさらに深く検討していく必要があるだろうというように思いました。全体会議でまた詰めることもできるかと思しますので、とりあえずこの5番目の項目についてはこれだけにしておいて、次、石原さんなどにもご意見をお伺いすることがあるかと思いますが。次の項目7番目、「歴史の継承と資産としての活用」ということがございます。これにつきまして、前回石原委員より、「琉球文化という裾野の広い世界は、観光的な裾野とも大きく合致しているはずであり、これがうまく噛み合っていくことで琉球文化ルネサンスという概念が大きく整理されていくのはないか」というご意見を出していただいております。今回のたたき台に対する意見としてですね、裾野の広い琉球文化をどのようにすれば発信できるかということをマーケティング的な観点からご意見いただけますでしょうか。

#### ○石原委員

平良先生のお話ですとか、鈴木先生のお話を伺いながらなるほど、なるほどと思ひまして。要は文化の実業の方に関わるものではなくて、それを支援する側としてお話をさせていただきたいんですが。文化的には絶えず伝統と革新というものが揺れ動いている中で発想されていると思います。例えば、ほぼ保全ということによって、すごくアカデミックな活動になってる。そこはたぶん政策的に言っても、明らかにほぼ保全するための政策をとっていかなければいけない。ただ、そこにはその同時代性というものがないので、次がなかなか見えてこない。そうすると、その同時代性を獲得するためのジャーナリズム的な活動というのはどうしているんだ。先ほどからその話が出ている、職人として食べていくためにはどうしなきゃいけないんだということで、そこは産業振興の話であり、コマーシャリズムというものをどう捉えているかという話になっていくかと思う。これはもう芸能関係もまさにその通りで。そのコマーシャリズムの行き着く先にある程度ポピュラリティーというものが確立されていて、そこにマーケット市場化が生まれてくるという。そういう話なんだろうと思うんですね。琉球ルネサンスというのを政策的に捉えていく、あるいはマーケティング支援的に捉えていくと、こういうエバリエーションといいますか、こういう評価軸みたいなものを少し備えていく必要があるんじゃないだろうかというところを、今強く感じているところです。そのペーパーを後で回していただければと思います。その今、沖縄の文化をいろいろ切り分けて捉えていったときに、今申し上げたような系図の中で、どこにどう位置づけていくかということ議論していかないと、闇雲に産業振興だ、保全だ保護だという議論しても、なかなか答えが行き着かないと思うんですよ。ここはこういうプロセスの中で、今こういうことをしなきゃいけないんだ。同時代性の獲得がすごく大事だと思う、あるいは今、こういうところで職人たちが困っている、とすると、そこで明らかにマーケット作るための行為行動が必要なんじゃないだろうか。そこで市場化されていって、市場化されればそこで人が食べているわけですから、後継者の育成ということに明らかにつながっていくという。そういう因果関係の中で物事を整理するという議論の進め方が、文化そのものを議論することとは別に、政策的な議論として必



要なんじゃないかというところが指摘させて頂ければというところでございます。そのようなフレームが出来上がってきますと、もう少し明快な議論ができて、あるいは、行政の中でも各部局で具体的な政策を残せる可能性が出てくるんじゃないかな、というところを強く感じさせていただきました。

#### ○波照間部会長

どうもありがとうございました。非常に明快な整理だったというふうに思います。いわゆるアカデミックなところからジャーナリズム、コマーシャルリズムを経てポピュラリティという段階がある。これは先ほど鈴木さんが話された文化として残すか産業として残していくのかという問題。まさにここに入っていますよね。そういう意味で石原さんの整理というものは非常に参考になるところも大きいご提案だというふうに思います。この項目7について、他にみなさんの方から何かございますか。ございませんでしたら、先に進んで参りますけど、よろしいですか。

それでは、次に項目の8番に移っていきます。琉球文化のルネサンスということ、柱に据えて議論をしているわけですがけれども、前回、第1回目の全体の会議で、嘉数委員より「沖縄の芸能の原点、特に宮廷芸能、古典芸能発祥の地である首里城」というご発言がありました。また、「首里城から発信するものが、初めて見る方によいものをよい形で見てもらうことで次のステップにつなげていければ」というお話でした。「首里城でみせるいいもの」とは具体的に事例等も含めまして、事例も含めたと言いながら簡単には言いにくいんですけども、要領よくお話くださいませでしょうか。よろしく願います。

#### ○嘉数委員

前回、よりよい形でと発言をさせて頂いたところですが、今現在の琉球芸能中心にいますと、継承していく、伝えるというのは徐々に徐々に大変恵まれた環境に私達は身を置かせていただいていると思います。ただ、それがまだ完璧なスタイルとして成り立っているかという、決してそうではなく、だからこそ、今後はさらにその質を高めて、よりよい形で発信していく、これは首里城での発信もそうですけど、沖縄県、琉球芸能全体的に言える課題かなと思います。技術の継承という面では、先人たち、先生方からその技の継承というのは、脈々と、というか、しっかりお習いをする機会がありますけれども、どうしてもその身につけるものであったり、手に取るものであったり、そういうところまでは配慮がまだまだなされていないというのも現状ではないかなと思います。そこはもう本当に先ほどからお話出ていますけれども、伝統工芸の方々との連携も必要になってきますし、今、現状では正直、本物の染め織り工芸を身につけて出るといっては、かなりハードルの高い、またもっと私たちが学んでいく点があると思いますし、それが、ほぼイミテーションといいますが、レプリカで利用しているところは、今後改めていく、次のステップとなる点かなと思います。そういう面で今後、新しいスタイルが求められるという点では、やはり現状では実演家の方々の情

熱によってほとんど保たれている状況でして、正直、その生計的な土台が皆さん安定しているものでもなく、自ら芸を学び、そして身に着けるものも準備して自分で準備する中では、どうしてもそこまで手が回らないのも正直なところだと思います。ですから現在、環境の設備、国立劇場おきなわ等も含めて、劇場やそういった発信する場というのはかなり整ってきたのかなと思います。次はその中身を作り上げていく。ソフト面をどうしていくかというところが、今後の大きな課題になってくるかなと思いますし、また私たちの責任でもあるかなと思います。すべてその行政に頼るということでもありませんけれども、まだまだ芸能自体で自立をしていく。収入を得て、それが準備できるだけの資金を確保していただくだけの収入が、例えばその入場料金だけで補えるものになるには、まだまだ時間がかかるのかなという面では支援も頂きたいところです。まさに今回首里城で関連していくと、どうしてもその王朝時代の姿というのがまだまだ不明な点、見えてない点も芸能面も非常に多くあると思います。ですから、調査研究に基づいた復元研究の舞台であったり、そういった発信というのも必要になってくるでしょうし、また、王朝時代から現在まで形を変えつつも、新たな芸能も次々と生まれてきましたので、今後また新しい取り組み、挑戦、創造というのも、首里城からあって良いジャンルではないかなと思いつつ、多くの方々に知ってもらいたい見てもらいたいという点では、まさしく目標となる姿に記されているように、特に沖縄県の方々にはその価値を再認識していただき、普及啓発に努めるということは、これまでも県の方針でも様々な展開がされていると思います。様々な鑑賞の機会を提供する、ということまではいっていると思いますが、今後もその提供するだけでなく、それをどうやって位置づけていくか。どうしてもその次世代にその琉球文化をしっかりと、良さを知ってもらうためには、やはり触れるという機会が何よりだと思いますし、まさにそこはもう次世代に託すという意味では、教育現場のお力を大きく借りなければいけない。それを提供しますだけでなく、必ずそれに触れる。必ず首里城を目で見る、芸能を肌で感じる、工芸品を目にするっていうような取り組みができる教科書上だけの学習ではなくて、直に本物を感じるスタイルというものをまた取り入れていかなければ、その琉球文化のルネサンスというところにはいくことができないだろうし、ここは避けられない過程ではないかなというふうに今回みせて頂いて感じました。以上です。

#### ○波照間部会長

芸能に具体的に従事していらっしゃる嘉数さんから、琉球文化のルネサンスについて、問題点及び展望についてお話をいただきました。芸能については崎山律子さんも深く関わっておられるということですので、崎山さんから、嘉数さんのお考えについて補足、あるいは崎山さん独自のお考えがございましたら、お出しいただけますか。

#### ○崎山委員

焼けてしまった首里城を考えたときに、首里城が残したものがたくさんあるかと思いますが、よく嘉数さん自体が舞台でも演じます、「かぎやで風」ですね。改めて思い出しながら、「きゆぬふくらしやや なうにじゃなてたている ついぶでいうはなぬ ついゆ ちゃたぐとう」私たちはこれを祝儀曲として繰り返し演じます。また「かぎやで風」か、と言われますけど、やっぱりこれはあの首里城で培われた 1 つの文化観、人生観、沖縄の人たちの美学がやっぱり集約されていると思います。この中で言わんとすることは、沖縄の人たちがあの最大の喜びを満開の花に例えるのではなくて、つぼみの花がこれから開こうとしているところに、あの素晴らしさを感じているということです。私たちが目指す首里城はまさに今、私たちが現在生きている限り、持てるものをいろいろ持ち寄って考えますが、完成させていくのは次の世代。この先の 100 年、200 年あるいは 300 年で捉えるルネサンスでもあるかな、というふうにも思っています。そのことを唱えながら考えていくと、首里城を有形無形の両面から考えなければいけないと思います。その中でこちらの 3 ページで、平和を希求する沖縄の心という表現があります。沖縄の心というですね、大変抽象的で深くて広くて、県民それぞれに沖縄の心があるわけですよ。でも、その沖縄の心はなんだろうといった時に、ここであの首里城、やはり、先の沖縄戦だけではなくて、平良さんからもご意見がありました 1600 年代の薩摩支配後の琉球の様々な交流を含めて、そのスパンの中で沖縄の人たちの考え方、沖縄の心とは何かということ、この首里城を中心に考えていくことも、とても建設的なことだろうと思います。その中でいえるのは、さっき言った文化財としても目に見えるもの、触れることができるもの、感じるすることができるもの、そしてそれと合わせて無形のことをどういうふうに捉えるか。1992 年の首里城は再建された時に、私はもちろん素晴らしいと思いましたがけれども、玉陵のように自分の心の魂に響く建物ではあまりありませんでした。それはやっぱりこの心の象徴というのが一緒にやっぱり語られてこなかった部分、抜け落ちた部分だったのではないかなど。そのとき首里城の再建に関しては、当時は賛否両論あったわけです。でも今さまざまな意見が寄せられていて、私はあの募金活動以上に沖縄の県民たちが第 32 軍指令部壕を考え、龍柱の向きを考え、首里城に何を望むかというそれも途切れることがなく、様々な形で意見が交わされていることが、沖縄の今の体力かなと思うんですね。文化を考える。やっぱり多くの意見がたくさん出たほうがもちろん、とてもいいと思います。ただ、その沖縄の心の中に私はやっぱり見えないもの。例えば、あの首里城が祭政一致で国王をはじめとする男たちの政治を語る場であり、また聞得大君を中心とする女たちの祈りの場であったわけですよ。でも、その首里城にとっても大切な魂の部分となる祈りの空間の演出はほとんどなかったような感じが致します。もちろん首里森御嶽があって守礼門にもいきました。そこで女性がお祈りしたりしてはいますが、そういう共有する空間が御内原が完成されてようやくそこが見えてきたのかなと思った矢先に首里城が焼けてしまいました。ですから、沖縄が誇る心の中に、ここであの国王と聞得大君という男女が力を合わせながら、ここにあの平和を目指して人々の安寧を求めて祈りをした空間があるということ、1 つの文化として、心としてとらえる、

その平和を希求するといった時に、単に32軍司令部壕だけではなく、様々な近代の歴史以外にもこの島の成り立ち、その間得大君の教えが島々に渡って行き、島々で様々な祈りが捧げられ、その祈りは民俗芸能となって、また人々のエネルギーに繋がっていったんですよね。そういうことを踏まえた目には見えない心の文化と言うものを単に抽象的に沖縄の心と言ってしまって終わるのではなくて、そこから始める何かをこの首里城の再建に向けて同時に県民と一緒に作っていけるといいなと思いました。あの、最近、読谷村の文化協会の方とお話をしていましたらですね、「首里城？僕らには座喜味城址がある」って言われたんですよ。素晴らしいと思いました。これこそが首里城の役割なんですよね。私たちには今帰仁城跡がある、いやいや、私たちの勝連城址がある。それが素晴らしいのであって、首里城に集約されるのではなくて、首里城から始まっていく沖縄の本当の文化というのが、琉球ルネサンスかなというふうに思いたいと思います。それは私が会うことのないであろう100年、200年、300年とつながっていくことがひとつひとつ工芸であったり、芸能であったり、そして生き方であったり、その生き方の中にやはり平和を希求するという、大きな柱があることが人類に寄与する、大きな首里城でもあるのかなというふうに思ったりしています。以上です。

#### ○波照間部会長

どうもありがとうございました。嘉数さんにはいわゆる首里城でやる、あるいは、首里城に特定しなくてもよろしいと思うんですけれども、具体的に沖縄の芸能を演じる時には、本物で技術も素晴らしいけれども、衣装であるとか、手に持つ小道具、採り物の一つ一つも本物である。そういう本物が持つ迫力と申しましょうか、迫真性、力、そういったものをぜひこの機会に実現できればいいと。特に首里城でやられる芸能公演等については、これをやっぱり目指していくべきことだと思うんですよね。首里城でやるのに化学繊維の、そして化学染料で染めた紅型をつけて踊られても、あまりいい気持ちはしませんよね。それこそ本物で首里城の舞台に立っていただきたいと願うのは決して私だけじゃないと思います。まさに、琉球文化の粋を集めた芸能が首里城で見られるというのは目指す価値があると私は思います。そしておっしゃるように、次世代につなげるというのは、学校教育に頼る部分が非常に大きいと同時に、先だって県の方と話をしているときに、余談のように話をしたんですが、我々の年齢あるいは、我々の下の世代を含めて組踊を見たことがない人はたくさんいるんですよ。残念ながら。それこそ宮古、八重山から始まって沖縄中に組踊を見たことがないという方が今なお何10万人もいるということ、これが事実ですね。それをやはり我々は考えなきゃいけないと思うんです。それは組踊だけじゃない、格式のある琉球芸能の美しさ、すばらしさ、奥深さを知ってもらえる。そのためにはどうすればいいか。まさにこの今回の首里城を再考する、中期的、短期的な目標の中に入れておいて、僕はしかるべきことだというふうに思っております。この事業は当然、現在、県立芸大を卒業した芸能家、あるいは国立劇場おきなわで養成された組踊の立方や地方の活動を支えることにもなっていくはずですよ。そういったことも是非、次世代あるいは現役の我々の

琉球文化に対する理解を深める上では重要な事業だろうというふうに思っております。

崎山委員のお話の中で、いわゆる沖縄の心に関する部分、宗教生活にかかわる部分についての話がありました。宗教と政治というのは非常に難しい問題はございますけれども、実は世界遺産の中に、斎場御嶽がありますが、あれは琉球国、そして地域の宗教施設なんです。世界遺産に登録されているというのは、この琉球という島嶼地域、島嶼国家のものの見方、考え方、それがここに集約されているという考え方なんです。御嶽信仰という、キリスト教とか、仏教とか、そういった宗教としての御嶽信仰を推奨しているわけではない。この地域における1000年、2000年の歴史の中での地域の人たちの精神生活を伝えるものとして、斎場御嶽は含まれているんです。そういう意味では首里城における京の内というのがあります。そして、首里城には御嶽がある。そういったものがより、この地域に根ざした、宗教的あるいは信仰的な生活を伝えるものとして活用されるようになっていくといいなと思います。私も同感でございます。そのようなご指摘だと私は受け止めました。そういった精神生活の問題も非常に重要になってくるだろう、というご指摘でございます。

さて、鈴木委員は那覇市の染物・織物の体験・発信拠点に関する事業にも関わっていらっしゃるとお伺いしました。「本来文化は横でつながって存在しているはずであり、面で展開してPRやコンテンツを提案してはどうか」と前回発言しておられますので、県のほうから提起された、たたき台に関して、先程触れられたご意見に即しながら、ご意見お聞かせいただけませんか。

#### ○鈴木委員

今日2つ、ご意見を述べさせていただきたいなと思うんですけれども、先ほど平良委員からお話があった、ルネサンスはどこの時期に、というお話がありましたけれども、私もここは非常に興味深いご意見かなと思いました。県の方からも回答がありましたけれども、決してある時代に回帰することではないということで、そこをベースにしながら、どう進化させるかというところかなと私も思い、同感するところです。やはり日本の産業革命以降の、日本でいう明治、近代化のことを考えると、やはりこの1609年、薩摩が沖縄へ来る前と1879年のここがターニングポイントになると思いますが、この近代化する前に大きな重要なヒントはあるのではないかとということ、間違いなくいえるのではないかなということ、先ほど県の方がおっしゃったように、その後急速に文化も含めて日本化が進んで沖縄戦があり、アメリカ統治下を経て沖縄県、また日本になったという非常に苦しい歴史を歩んできたにもかかわらず、これだけ日本の中でも沖縄独自の文化が残っていることだ、と。工芸でいうと、日本があれだけ近代化して機械化されて工芸の産地も機械化が進む中で、なんでこれだけ手仕事が残っているのか。あと以前も平良委員がお話した意見がすごい印象に残っているのが、芭蕉布とか産業革命以前の物作りのやり方が未だにやっぱり作られているのはなぜなのかっていう。これだけ荒波も、歴史の荒波に揉まれた中で、工芸含め、それ以外の文化も、何故ここまである意味残り続けているのかってところに何か、地層で言

うところの古層の部分に何か今回の方針を考える上での大きなヒントが私は残っているんじゃないかなというふうに感じています。そこは専門ではないんですけども、先生方のご意見もこの会の中でぜひお聞きしたいと思っていますところです。2つ目なんですけれども、具体的にこれをどういう形で活かして行って、方針として出していくのかということなんですけれども、私は3つキーワードがあると思っておりまして、一つは、文化の業界、工芸もそうですが芸能を含めた文化のそれぞれの業界がオープンになることが非常にベースとして重要ではないかと思えます。どっちかという、文化の人たちの中でのクローズのイメージがどうしてもあって、実際、一般の方がとつきにくいということもあるので、まずオープンであるという一つのキーワードであると思えます。もう一つが「多様性」です。それぞれの、例えば工芸の中でもなかなか横のつながりがなかったりします。先ほど嘉数委員がおっしゃったように、工芸業界と芸能の業界も実はあまりつながりがなかったり、どうしても接点がなかったりします。新しい文化の価値や生活スタイルを生み出す、創造していくっていうキーワードが入っています。これから文化を創造していくにあたって、文化同士もそうだが、流通、IT、テクノロジー、色んな業界が、イメージでいうと網の目状につながっていくことが非常に重要ではないかということ、文化業界同士ももちろんですが、異業種も含めた多様性をどうやって担保していくのかということ。三つめが、継続性が非常に重要ではないかと思えます。産業と違いますので、産業はある程度短いスパンで成果が表れたり、短い期間で成果を出さないといけないということがあるのですが、どうしても文化に関しては時間がかかりますので、長いスパンで物事をみて、方針と計画を出していく必要があるのではないかと思います。具体的な例でいうと、今週、沖縄の織物と染物の組合員の皆さんと那覇市の方々と一緒に、北陸のほうを回ってきたんですが、今回、非常に参考になったのが、それぞれの業界がオープンになって観光業界と繋がったり、産業観光だったり、他の産地は今、オープンファクトリーみたいなイベントをメインでやるのが多く、イベントをやることで地域のいろんな人たちが、今まで繋がっていない人たちがイベントをやることでそこでつながりが生まれて、継続して新しい活動をしていくということがあります。あとは、金沢の21世紀工芸祭というのを今ちょうどやっています、これは異業種、工芸と色んな業界の人たちが連携して活動する、といったところが他の産地では今動きが出てきております。最終的には10年20年スパンでいくと、教育との繋がりをどう作っていくのかということが非常に重要。これは先ほどの継続性ということ、子供たちに対してどう発信していくのかというのが非常に重要かなと思えます。金沢市の取組をお聞きしてきたんですけども、昔の竹下内閣の際に地方創世で1億円を配るという時に、金沢市は職人さんに対して基金を作って支援していくというのを始めて、今日まで20年以上継続して金沢市は支援を続けている。20年間続けるというのは非常に大変なことじゃないかと。それくらい金沢市としては職人さんと文化に関して継続して育てる、それは教育も含めて実践しているということが非常に継続性が大事だというふうに感じました。オープンと多様性と継続性をぜひキーワードに、方向性を議論できたらと思

ます。

○波照間部会長

鈴木委員、どうもありがとうございました。

さて、今回、このたたき台を県のほうで準備していただきまして、文化財等の保全、復元、収集に関する事柄、伝統技術の活用と継承、歴史の継承と資産としての活用、琉球文化のルネサンスということがらについて、委員の先生方のご意見を伺いました。それぞれ、ご自分の立っていらっしゃるところからの貴重なご意見だったというふうに思います。平良委員のほうから、いわゆる職人にしっかり勉強してもらえるための受け渡し、そのような観点から、美術館、博物館、そういうところでの琉球工芸品の粋を集めた展覧会などをやるという提案ですね。今、そういう声をお聞きしまして、まさに首里城復元の機運を盛り上げていく、そして令和8年には正殿が完成する。更に今後南殿、北殿も含めて全体を完成していくという流れの中で、県では令和13年までに何度も何度も繰り返し日本全国、さらには世界の人々に沖縄の首里城を中心とした琉球文化の発信をしていかなければならない。そういう意味で平良さんが話をされた、沖縄県内の美術館、博物館だけで仕事を負わせるのではなく、日本全国、さらには世界の沖縄の資料を保存している美術館、博物館も巻き込んだ、広がりのある展覧会などを周年事業としてやってみたらどうかというふうに私は受け止めました。これは非常にやる価値のある、大変大きな、そして県民の協力、職人の技の継承にも関わって重要な提案だろうというふうに思いました。

鈴木さんにも先ほどお話いただきましたけれども、工芸という世界はそのまま産業として成り立つものもあるけれども、そうではなくて文化として残していくというような見分け方も必要だろうというご指摘でした。

これと関連して、私も目からウロコでしたが、石原委員のほうから、伝統から革新へという、これは大きな全ての我々の生活含めて、伝統から革新へという大きな流れの中にのっているわけですけど、その活用をアカデミズムの学者の先生方、研究者がその価値を発掘する、そして保全・保護に向かう、そのアカデミズムの動きをジャーナリズムが世の中に広めていく。そのジャーナリズムが動いたところで産業化、コマーシャルの力が働く。そしてそれが一般化していくと、市場が実現して、工芸も当然産業として成り立っていく、ひとつの線なんです。図式、ものの考え方、素晴らしく立派に整理された考え方を提示していただいたというふうに思っております。この考え方を我々の部会、そして県の施策に反映していく、色んな場面で使える考え方だと思います。

嘉数委員のほうからは、首里城において観る芸能は全て本物、素晴らしい、超一級のものが集まって首里城の舞台が成り立っているという環境をつくってほしい。首里城でやれば当然国立劇場に波及し、そして色んな場面に波及していくという考えにおいて私も同感であります。衣装や採り物、ひとつひとつ含めて本物をぜひ首里城でみせてほしいという提案、さらには次世代への受け継ぎ、それは当然、学校教育の力を借り

なければならない、あるいは諸先生方が運営している研究所の力も必要でしょう。私が個人的に考えていることは、現代の沖縄県民の中で、組踊を観る、本物の琉球芸能に親しむという人たちをもっと増やしていかなければならない。これは県民が行うべき行政的な形での、琉球芸能、沖縄芸能の普及の取組だろうと私は思っております。

崎山委員のほうからは、首里城を単に有形のものとしておわらせるのではなく、同時に無形の文化を伝えるものでもあると考えるべきという視点が提示されました。そういう意味で祈りの空間としての首里城という位置づけ、玉陵、斎場御嶽、世界遺産だけみてもそれだけあります。ところが、我々の普段の日常生活の中に沖縄のなかでどれだけの御嶽があると皆さんお考えになりますか。100とか200のレベルではありません。『琉球国由来記』という1713年に編纂された史料によると1713年に首里城王府が公認した御嶽の数は全部で929あるんですが、そのなかには宮古の御嶽は29、八重山は78しか記載がなかった。宮古は今御嶽がどれだけあるかという、平良市が『宮古のお嶽』という本を出しているがそこに882ある。八重山については78しかありませんが、牧野清という先生が『八重山のお嶽』という本を出しましたが、それには232あります。単純計算で1930くらいあります。これに沖縄諸島の御嶽を加えると、どれだけになるかわかりません。つまり、これだけの御嶽の文化というのが我々の周囲にあるんですね。その中で我々は生きている。そういったことも琉球ルネサンスのなんらかのインパクトを形成していると考えなければいけないというふうに思う。そういう意味で首里城及び世界遺産というものをただ単にそういうものがあるというだけでなく、我々の生活と密着しているという観点で伝えていく、沖縄県民に理解してもらい、認識してもらいという仕事があるだろうというふうに思いました。

最後に鈴木委員からお話をお伺いしまして、伝統工芸、そしてさらには工芸を産業化していく、といった中で何が大切か、3つのキーワードというお話でした。文化事業界のオープン化、多様性を大切にする、そして三番目に継続性、ということではやはり教育のこともお話されておりまして、そのところは嘉数さんのお話とも共通するという面では、我々の次の世代をしっかりと教えていく、伝えていく、そのためには教育という制度をしっかりと活用しなければいけないという点で認識が一致しているというふうに思います。沖縄の文化、琉球文化をどのように次の世代に伝えていくかということは、そういう意味で、我々がここで議論するだけでなく、学校教育等々とも深く関わっていかなくてはならないという指摘だったと思います。先生方のご意見を聞かせてもらって、私個人の感想もお伝えしましたが、今お話いただいたことなどをしっかりと組み込んでいく、我々の考え方、それを整理していただきたいと思いますが、ルネサンスというのは、上のほうで行われるものではない、沖縄県民全体がルネサンスの主体にならなければならない。本日のたたき台として提示されました資料には、琉球文化とは、風土的性格、王朝性、国際性、というふうに3つにまとめております。風土的性格のところ、庶民階層による民族文化ということを書いてくださっておりますが、私は風土と庶民・民衆と王朝性、国際性と4つ。風土と庶民の生活があって、王朝があって、国際性につながっている。少なくとも風土と歴史というのと、庶



民というのと、そして庶民と王朝と対立という言い方はおかしいですが、別に数えるべきだと思う。そうすることによって琉球ルネサンスというのは、庶民のバイタリティ、生活力、創造力、それが王朝文化と一緒にあっておこっているのが琉球ルネサンスである、と捉えたい。そのほうが県民主体のルネサンスということが強調しやすくなると思うので、4つの項目としてはどうかと思います。琉球ルネサンスの主体は県民一人一人だということを強調する方向性を強調しておきたい。4ページの図は県のお考えかと思いますが、ちょっと刺激的に見えます。首里城や世界遺産等を中心として、庶民の問題、工芸の問題などが周辺にあって、これらが首里城や世界遺産等が核となっている部分と密接につながっているという図を示したほうがよいのではないかと思います。皆さんも皆さんなりに琉球ルネサンス、首里城の復元というこの図をご参考に、ご自分の絵を書いていただいて、次の会議でも示していただければありがたいと思います。

本日、議論していただいたことについて、新・首里杜構想検討部会等で検討されるであろう項目もあわせて、来月の有識者懇談会において、本日とりまとめたことは改めて議論される予定です。この部会については、次回は12月下旬の予定です。復興基本計画案について議論する予定となっております。本日のたたき台をより詳しく提示した内容になってくると思います。

これで本日の議事は終了ですが、事務局より連絡事項あれば宜しく願います。

#### ○事務局（屋比久特命推進課長）

閉会の前に、関係課の皆様もWeb参加しています。今日の議事をお聞きして、あるいは私の回答に対して意見があるかもしれませんが、Webの接続状況が悪いようなので、本日いただいたご議論の内容を特命推進課でとりまとめまして、庁内でブラッシュアップしていきたいと思います。ルネサンスについて私が申し上げたことは庁内で議論した上での内容ではございませんので、これについても確認をした上で、とりまとめていきたいと思います。

#### ○事務局（知念特命推進主幹）

波照間部会長、委員のみなさまありがとうございます。事務局より連絡事項を申し上げます。部会長よりご案内のありましたように、本日の議論を基に、来月中に有識者懇談会を開催する予定となっております。各部会での検討内容を踏まえた総合的な議論をして頂く予定です。本部会については12月中に開催する予定となっておりますので宜しく願います。日程については改めて調整させていただきます。

また、本日の議論について、来週中には議事録を委員の皆様にもメールでお送りさせていただきます。お忙しいところ恐縮ですがご確認をお願いいたします。事務局からの連絡事項は以上となります。

これもちまして本日の琉球文化継承・振興検討部会を終了させていただきます。皆様、本日はありがとうございました。